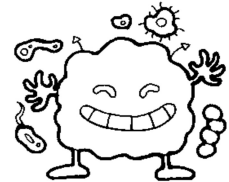




うしくり通信

新型インフルエンザ



最近あらためて新型インフルエンザ報道が目立ってきました。夏場になれば落ち着くといわれていたものの、確実に患者数が増えています(6月26日に1000人を超え、7月24日時点で5000人を超えました)。

今回の新型インフルエンザ騒動の反省点として、マスコミによる偏向報道と政府の行き過ぎたアピールにより、国民の意識に必要以上の不安感が刷り込まれたことがあげられます。そのため、今年のインフルエンザシーズンは例年にも増して混乱が危惧されます。数ヵ月後にやってくる季節性のインフルエンザと混在した流行に対して、我々は何を注意すればよいのでしょうか。

まずいくつか予想できることがあります。新型インフルエンザの予防注射は季節性インフルエンザのようにすべての希望者にいき渡らないことと、新型迅速検査キットが広く頒布されることは期待できないということです。

また、「タミフル」が原則10代には処方しないということを前提に治療薬として認知されたことは良かったのですが、「リレンザ」を含めて治療薬の予防投与などの過剰治療の可能性が懸念されます。

来るインフルエンザシーズンに向けての注意については、以下のような点があげられます。

- 1) 季節性インフルエンザだけでも予防注射を行う
- 2) ありきたりですが、マスクの使用、うがい・手洗いの励行
- 3) 発熱した場合はすぐ医療機関に駆け込まず、水分をしっかりと取りながら1日様子を見て、検査の正確性が上がったところに受診すべき。
(受診する医療機関に事前に受診の可否を電話で確認する)
- 4) もしインフルエンザに罹患したら、あきらめて1週間自宅で安静にする。
(解熱後2日間は感染力あり)

※ 横浜市では7月現在、集団感染の可能性がなければ新型か季節性かを区別する必要はないということになっています。

院長コラム

新型インフルエンザの世界的流行で、各国の対応の曖昧さと、患者数統計の不正確さが目につき、日本の医療水準の高さを感じました。

しかし日本の予防接種の普及率(インフルエンザ以外も含む)が欧米と比較して低いのを御存知でしょうか。水際検査まで行う国のわりには温度差を感じます。国民性が、目の前の敵には必死に抵抗しますが、見えにくい敵には手薄になる傾向があります。